

## 課題

### 地域の中高年者を対象にした終末期学習プログラムの開発と効果の検証

名古屋大学医学部附属病院卒後臨床研修・キャリア形成支援センター

平川 仁尚

#### 背景)

高齢者が増加しており、高齢者の終末期ケアの重要性が高まっている。そして、高齢者本人と家族の希望や昨今の医療事情から、病院外、特に在宅での終末期ケアのニーズが高まっている。しかし、多くの国民が病院で死を迎えるようになった昨今、在宅療養を支える家族は人の死に直面した経験が乏しい。在宅における終末期ケアの質の向上のため、また家族ケアの一環として、家族に対して正しい死の準備教育を行う必要があると考える。

しかし、家族の医療情報源は医療の専門家でない場合が多いとの報告がある<sup>(1)</sup>。つまり、終末期に関する適切な医療情報が家族に提供されていない恐れがある。医療関係者が監修する、標準化された家族向け終末期教育プログラムの整備が急務である。本研究の目的は、主介護者に相当する年代である中高年者を対象とした地域における終末期学習プログラムを開発し、その効果を検証することである。

#### 方法)

平成 22 年 4 月に、生協わかばの里介護老人保健施設(名古屋市北区)と合同で、地域の中高年者を対象にした終末期学習プログラムの立案に関するワーキンググループを立ち上げた。プログラムの立案には介護職員が主に携わり、生協わ

かばの里介護老人保健施設で過去に実施した介護職員向け終末期ケア教育の内容<sup>(2)</sup>を参考にした。その結果、プログラムの手順は、職員による絵本の読み聞かせ、概説、グループディスカッションであった（表 1）。まず、介護職員が参加者に対して絵本の読み聞かせを行い、グループディスカッションを行うこととした。概説の内容は、高齢者の死にゆく過程、高齢者の終末期の定義、加齢に伴う身体的・心理的・社会的変化、クオリティー・オブ・ライフ、嚥下障害、家族の抱えるストレス（家族ケア）、延命・救命・リビングウィルなどであった。リビングウィルについては、啓発パンフレット<sup>(3)</sup>を教材として用いた。最後にグループディスカッションによりプログラム全体を振り返ってもらうこととした。プログラムの時間は 75 分であった。

表 1. プログラムの手順

1. 職員による絵本読み聞かせ「大丈夫だよ、ぞうさん」とグループディスカッション（25 分）
2. 概説：終末期について（20 分）
3. 概説：リビングウィルについて（DVD か冊子）（10 分）
4. 全体の振り返り（グループディスカッション）（20 分）

平成 22 年 5 月から平成 23 年 3 月までの間に、地域の中高齢者（生協わかばの里介護老人保健施設に登録している生協組合員）21 名に対してプログラムによる学習会を実施した（各回 3～7 名、計 4 回）。平均年齢は 61.7 歳、性別は女性が 18 名だった。尚、各回の学習会は、講師もしくはファシリテーターとして 2 人の介護職員が担当した。

学習効果判定及び内容の改善点の抽出のため、各回の学習会の前後に、同一

内容でアンケート調査を実施した。アンケート調査の内容は、年齢・性別、職種、老化や終末期に関する意識、リビングウィル所持に関する意識、平井らの死生観尺度<sup>(4)</sup>であった。平井らの死生観尺度に関しては、短時間の変化を測定するのに適していないと考えられる項目「死後の世界はあると思う」「世の中には「霊」や「たたり」があると思う」「死んでも魂は残ると思う」「人は死後、また生まれ変わると思う」「私は死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」「自分の死について考えることがよくある」「身近な人の死をよく考える」「家族や友人と死についてよく話す」は除外し、合計点でなく各質問項目について検討した。そして、データの前後比較を行った。比較には 対応のある t 検定を用い、 $p$  値 $<0.05$  を統計学的に有意なものとした。統計には、PASW Statistics18.0 を用いた。

結果)

結果は表 2. に示した。多くの参加者は、プログラム実施前から終末期ケア、リビングウィルに高い関心を持っていた。プログラム実施前後において、終末期ケアへの関心、リビングウィルへの関心に関しては変化が見られなかった。死生観尺度に関して、死に対する恐れが減少する傾向がみられたが、その他の項目では変化がみられなかった。

表2. プログラムの効果 (n=21)

項目		班会前	班会後	p値
終末期ケアへの関心	ある	16	15	0.564
	まあある	2	1	
	どちらともいえない	1	1	
	あまりない	0	0	
	全くない	0	1	
リビングウィルへの関心	ある	16	16	0.707
	まあある	1	1	
	どちらともいえない	3	0	
	あまりない	0	0	
	全くない	0	1	
死生観				
	死ぬことが怖い			0.750
	当てはまる	2	1	
	まあ当てはまる	2	2	
	どちらともいえない	10	8	
あまり当てはまらない	1	2		
自分が死ぬことを考えると不安になる	全く当てはまらない	4	5	0.331
	当てはまる	5	1	
	まあ当てはまる	2	3	
	どちらともいえない	5	8	
	あまり当てはまらない	2	1	
死は恐ろしいものだと思う	全く当てはまらない	6	6	0.016
	当てはまる	4	1	
	まあ当てはまる	0	1	
	どちらともいえない	7	6	
	あまり当てはまらない	1	2	
私は死を非常に恐れている	全く当てはまらない	6	8	0.016
	当てはまる	4	1	
	まあ当てはまる	0	1	
	どちらともいえない	7	6	
	あまり当てはまらない	1	2	
私は死について考えることを避けている	全く当てはまらない	6	8	0.695
	当てはまる	1	3	
	まあ当てはまる	2	1	
	どちらともいえない	9	3	
	あまり当てはまらない	2	3	
どんなことをしても死を考えることを避けたい	全く当てはまらない	6	9	0.206
	当てはまる	3	3	
	まあ当てはまる	0	0	
	どちらともいえない	6	4	
	あまり当てはまらない	2	1	
私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをほねのけようとする	全く当てはまらない	6	10	0.260
	当てはまる	5	2	
	まあ当てはまる	1	2	
	どちらともいえない	6	6	
	あまり当てはまらない	2	3	
死は恐ろしいのであまり考えないようにしている	全く当てはまらない	5	6	1.000
	当てはまる	4	3	
	まあ当てはまる	1	0	
	どちらともいえない	6	5	
	あまり当てはまらない	3	2	
私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している	全く当てはまらない	6	7	0.497
	当てはまる	0	1	
	まあ当てはまる	4	3	
	どちらともいえない	10	7	
	あまり当てはまらない	2	2	
私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある	全く当てはまらない	3	4	0.497
	当てはまる	2	2	
	まあ当てはまる	2	3	
	どちらともいえない	11	7	
	あまり当てはまらない	1	3	
私は人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとわかる	全く当てはまらない	3	1	0.187
	当てはまる	1	3	
	まあ当てはまる	2	2	
	どちらともいえない	12	7	
	あまり当てはまらない	1	2	
未来は明るい	全く当てはまらない	3	1	0.362
	当てはまる	1	1	
	まあ当てはまる	4	2	
	どちらともいえない	10	9	
	あまり当てはまらない	0	0	
「死とは何だろう」とよく考える	全く当てはまらない	3	4	0.333
	当てはまる	2	4	
	まあ当てはまる	3	0	
	どちらともいえない	3	4	
	あまり当てはまらない	1	1	
人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う	全く当てはまらない	9	8	0.864
	当てはまる	9	6	
	まあ当てはまる	1	2	
	どちらともいえない	5	3	
	あまり当てはまらない	1	1	
寿命は最初から決まっていると思う	全く当てはまらない	4	4	0.510
	当てはまる	9	6	
	まあ当てはまる	1	2	
	どちらともいえない	5	4	
	あまり当てはまらない	0	1	
人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている	全く当てはまらない	5	3	0.727
	当てはまる	5	5	
	まあ当てはまる	4	2	
	どちらともいえない	5	5	
	あまり当てはまらない	0	1	
	全く当てはまらない	6	4	

考察)

本研究は、地域の中高年者を対象にした終末期学習プログラムの試作を行い、その効果の検証を通じてプログラムの改善を図ることを目的としたものである。今回の結果では、参加者は終末期ケアやリビングウィルに高い関心を持つ集団であったことが示された。本プログラムは自由参加であったことが原因と考えられる。実際、データには示さないが、ファシリテーターを務めた介護職員の意見として、「参加者は我々職員よりも（終末期ケアに関する）知識を持っていた」、「参加者は特別な介入なしで活発に議論していた」などがみられた。総論的な知識の提供だけでなく、参加者の学習ニーズに合わせて更に各論にも踏み込んだ内容にする必要があると考える。ただし、地域の中高年者の終末期に関する学習ニーズを調査した調査はほとんどないため、この領域に関する更なる調査が求められる。

また、今回の結果から、本プログラムが死に対する恐怖心を軽減する可能性があることが示唆された。絵本の読み聞かせやグループディスカッションによる自省が今回の態度形成のきっかけになったと考えられる。高齢者介護施設職員を対象にした絵本を用いた死の教育に関する調査<sup>(2)</sup>では、絵本の読み聞かせにより、参加した職員の「死への関心」が高まると報告されている。今回の結果で変化がみられた項目に違いがみられたのは、ケアの提供者か受け手かといった立場の違いが影響したものと考えられる。ただし、本プログラムが死生観全般に影響を与えたとは今回の結果からは言えない。今後は、絵本の選定を含めて、死生観形成に有効な方略の検討が必要であろう。

参考文献)

1. Hirakawa Y, Kuzuya M, Enoki H, Uemura K. Information needs and sources of

family caregivers of home elderly patients. *Archives of Gerontology and Geriatrics* 2011; 52: 202–205.

2. 平川仁尚、葛谷雅文、植村和正. 介護老人保健施設の介護職員を対象とした終末期ケア教育の効果. *医学教育* 2009; 40: 197-200.

3. 平川仁尚、植村和正、加藤利章、葛谷雅文. リビングウィルに関する患者・家族向け啓発パンフレットの作成～大学医学部附属病院老年科病棟における試み. *ホスピスケアと在宅ケア* 2008; 16: 209-212.

4. 平井啓、坂口幸弘、安部幸志、森川優子、柏木哲夫. 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. *死の臨床*. 2000; 23: 71-76.